

一般社団法人 地域国土強靱化研究所 令和3年度年報

【代表理事ご挨拶】



2020年度の年報の最後に、次年度へ向けた抱負として、「社是である“前義後利を以って共助と自他共栄”を念頭においた新年度のキャッチフレーズとして、“技術と技術，組織と組織をつないで，新たなソリューションを見出すこと”を謳い，これをLRRIの具体的なスローガンとします。」と書きましたが，残念ながら，“新たなソリューションを見出す”という状況にはなっていません。ただ，以下にご紹介します本年度の活動報告にもありますように，その土壌は少しずつ醸成されつつあることを感じておりますので，このことの実現のため，会員の皆様とご関係の皆様の一層のご支援とご協力を宜しくお願い致します。

【部門活動報告】

≪事業部≫

① 第1回会員報告会の開催

令和3年8月25日（水）の年次総会後に，賛助会員・個人会員から6編の報告をフリーテーマで実施しました。賛助会員からは，LRRIの唱える国土強靱化に供する防災・減災技術の紹介がありました。また個人会員からは，熱海土石流に関するGISによる3次元化を通しての考察、LRRIによる「なんでも住宅相談室」体験レポートの紹介があり，LRRIをより身近に感じていただける試みが出来たと考えております。今後もこのようなイベントを通じて会員の皆様と親交を深めていく所存です。

② 茨城大学委託業務の遂行

技術開発・展開部と連携して茨城大学から委託を受けた“気候変動適応策に関するアンケート調査”(<https://s-18ccap.jp/information/post-1461/>をご覧ください)と，それに続いて現在委託を受けています“日本における適応策の集約&分析業務“を中心にした活動を行っています。

③ 「岐阜県における太陽光発電所事業に関わる盛土の安定性に関する意見書」

昨年の事業報告にて，令和3年5月12日に県に対する意見書を提出し受理されましたことをご報告いたしました。ご承知のように，昨年発生した「熱海土石流」の影響で盛土規制が厳しくなることが想定されております。このような状況を踏まえ，造成盛土斜面安定検討のための追加地質調査等を実施すべく，引続きサポートを継続しております。直近では「斜面防災」に詳しい個人会員にも加わっていただき，代表理事の目指す“組織と組織をつなぐ新たなソリューションを見出すこと”が少しずつ動き始めていることを実感しております。

≪技術開発・展開部≫総括

① 「気候変動対応技術&ビジネス研究会」

事業部と連携して茨城大学から委託を受けた“気候変動適応策に関するアンケート調査”と，それに続いて現在委託を受けています“日本における適応策の集約&分析業務“を中心にした活動を行っていますが，その成果を会員の皆様に還元し，成果を共有する努力を続けていく所存です。

② 「インフラリハビリ研究会（IRT研究会）・FS工法分科会」

分科会構成メンバーによる数回の会合を開くとともに，以下のような活動を行いました。

i) “社会インフラテック展 2021”出展

令和3年12月8日～10日、地域国土強靱化研究所名でFS工法分科会メンバーの老朽化対策工法を出展致しました。東京ビックサイトにて、初日雨にも関わらず3日間で39,465人に来場頂き、橋梁の対策から管更生までのラインナップで来場した方の興味を引くことが出来ました。

ii) FS工法がNETIS登録されました。詳細は以下の通りです。

・NETIS番号：KT-220061-A、・新技術名称：フォームサポート工法、・登録日：2022年6月16日

③ 「碎石利用地盤改良・補強研究会」

昨年10月に準備会（当面の参加組織は、みらい建設工業㈱、エターナルプレザーブ㈱と茨城大学）を立ち上げ、関連技術の一覧表の整理や変形解析の試算等を行いました。今後、設計法・施工法、適用性に関する検討を行っていきます。

《教育支援部》総括

① （一財）土木研究センターと連携した第2回技術者講座「最近の防災・減災技術」

昨年に引き続き、令和4年5月18日と25日の2日間、土木研究センターとLRRIが共同主催で「第2回技術者講座『最近の防災・減災技術』」が実施されました。講師は、土木研究センターの常田賢一顧問、了戒公利専門調査役、LRRIの安原一哉代表理事、須田裕之副代表理事・福山コンサルタント宮村正樹氏・同黒木幹氏が担当しました。須田・宮村・黒木三氏による「防災・減災のためのモニタリング&センシング技術」は、時宜を得たLRRIらしい特に新しいテーマでした。地盤工学会関東支部の共催を得て、88名の方々が参加されて、会場とオンラインのハイブリッド形式で行われました。

② 創設一周年記念フォーラム

令和3年7月3日（土）の午後、地震災害と液状化の権威の東京電機大学安田進名誉教授による記念講演を中心とした「創設一周年記念フォーラム」が、茨城県産業会館の会場とオンラインの“ハイブリッド形式”で開催されました。会場にお見えの方が10名、オンラインで66名、計76名のご参加を得ることができました。茨城、埼玉、東京、千葉4県に加えて、山梨・福岡からもご視聴いただきました。ご講演は、「液状化対策技術の現状と課題と展望」の題目で、1964年の新潟地震以来の液状化の歴史を振り返り、液状化に関する性能設計方法、液状化被害低減方法とそのキーとなるめり込み沈下量の算定方法、さらには、地下水位低下工法など地区全体の対策方法まで、幅広くかつ高度な内容を、大変分かり易く説明していただきました。アンケートからも「とても良かった：58.8%、良かった：35.3%、普通：5.9%」の結果が得られました。聴講された方々にとって大変有意義であったと確認できました。当日は熱海での土石流災害が発生し、翌朝にはヘリコプターで現場上空から安田先生が状況を解説されたことも印象に残っています。

③ NPOブルーアース主催E&E・防災セミナー

昨年度（第17回）に続きまして、「エネルギー&エコロジー・防災（E&E・防災）セミナー第18回」が、3団体共同主催で、令和3年①10月28日・②11月11日・③11月25日の木曜日3日間、オンラインで開催されました。従来からのNPOブルーアース・地盤品質判定士会神奈川支部に加えて、今回から新たにLRRIも共同主催者に加わり、所属する6名が講義を担当しました。中でも、熱海の土石流災害を独自に分析した浅野大我学生会員、中学生が英語で環境・防災国際ワークショップで発表するよう指導した今澤真紀会員の発表は、大変人気を博し、多くの参加者に感銘を与えました。また、安原代表理事が前回のセミナーで提唱した「防災意識・対策の『ワガ（ワレワレ）コト化』・『自助・共助・公助』」を主なテーマとして、一般市民からプロフェッショナルまで幅広い方々（延べ参加者数149名）が意見と情報を交換する「場」になりました。特に、行政職の方々が延べ18名参加されたことは、「輪」が広がった証として、特筆されることだと思います。

④ 資格取得支援講座

LRRI は発足以来、会員を対象にした資格取得支援講座を計画してきました。その第1回のプロジェクトが、「グランパ・カズ塾」として令和4年1月から6月まで9回に亘って、賛助会員企業様の要請で、オンサイトとオンライン併用によるハイブリッド形式で実施されました。開催時間帯は、17:00 から1時間ないし1時間半行われ、お忙しい中にも拘わらず、88%の出席率が得られました。講義は、安原塾長による「地盤工学基礎」、「軟弱地盤上堤体盛土」を中心に、伴講師が「地盤調査」、岸田講師が「技術者倫理」、そして、「擁壁の災害リスク」と「大規模造成盛土」では3名に加えて、外部の講師が担当しました。毎回、後半には、質疑応答に加えて、講師による事例紹介や参加者との意見交換が活発に行われました。参加者アンケートでも高い評価を得ることができました。今回の実績を活かして改善を図り、引き続き実施する計画です。

⑤ エルリの活動を通じての継続教育の促進（CPD ポイントの付与）

上記①～④を始め LRRI が実施する講座や講演会に参加された方には、継続教育ポイント（CPD ポイント）が付与されます。建設系 CPD 協議会に参加する地盤工学会、土木学会、建設コンサルタンツ協会、全国地質調査業協会連合会、日本技術士会などに登録できますので、技術者として継続的な自己研鑽の目安としてご利用ください。さらに、取得された地盤品質判定士などの資格更新や、今後展開が予想されます「技術士（CPD 認定）」などにご活用ください。



写真-1 E&E・防災セミナーの様子

【事務局便り】

本法人会員と個人会員のみなさまへのサービス提供および会員間の交流を図ると共に、地域社会、各種業界へ寄与、情報発信を進めるため下記の取り組みを進めています。

《本法人ホームページの更新管理》 ※URL : <https://lrri.or.jp/> 参照

構成を①LRRI とは ②業務内容 ③会員専用 ④入会案内 ⑤会員関連技術、⑥役員だより ⑦お問合せ（住宅相談）としています。また、併せて新着情報（ニュース・イベント）をホーム中央に配置するとともに、連絡先、会員リスト、関連リンクを下段に配置し、アクセスし易いものとししました。特に、会員専用ページは、各研究会情報等を掲載するとともに、会員相互の情報交換の場としています。また、年報もアップします。

《事務局体制の充実》

会員サービスの利便性向上のため、広報（HP,メルマガ等）、総務（セミナー事務、会計事務等）業務の整理、一元化に取り組んでいます。なお、令和4年5月からは、米川恭子さんに新たな事務スタッフとして加わって戴きました。事務局運営と本法人活動における活動に対するご要望、ご依頼、ご意見等お寄せ下さい。また、

事務局としてセミナー等の実施、開催支援を行ってきました。このコロナ禍の下、Zoom を併用したハイブリッド開催を試行して参りました。引き続き、ご支援、ご協力の程お願い致します。※ 窓口 staff@lrri.or.jp

《理事会（役員会）報告》

令和3年度は8回の理事会（役員会）を開催いたしました。議事録を「会員専用ページ」に保存していますのでご覧ください。

【情報活動】

① “社会インフラテック展 2021” 出展








令和3年12月8日～10日、地域国土強靱化研究所名でFS工法分科会メンバーの老朽化対策工法を出展致しました。東京ビックサイトにて、初日雨にも関わらず3日間で39,465人に来場頂き、橋梁の対策から管更生までのラインナップで来場した方の興味を引くことが出来ました。



写真-2 “社会インフラテック展 2021”でのLRRIの展示ブースの様子

② 日刊建設工業新聞にLRRIの取り組みが紹介

安原代表理事が令和3年10月21日に同社の鴨志田隆之企画部長様からインタビューを受けました。内容は、①地域国土強靱化研究所の成り立ち、②過去の経験に基づく地域の災害リスク低減法、③地域と意識を共有する方策でした。インタビュー概要は令和3年12月22日の同紙の“国土強靱化特集号”に掲載されました。

	一般社団法人 地域国土強靱化研究所 ホームページ https://lrri.or.jp 〒311-0105 茨城県那珂市菅谷4527 お問い合わせ staff@lrri.or.jp	
【賛助会員】		
 エターナルプレザーブ株式会社 東京都文京区湯島2-10-10 ESSビル3階 電話 03-5844-3155	 地水開発株式会社 東京都足立区綾瀬6-26-11 電話 03-5849-5701 日本の土台を新しく。	
メトリー技術研究所株式会社 埼玉県加須市南町3-40 電話 0480-47-0366	 岡三リビック株式会社 東京都港区港南1-8-27 日新ビル10階 電話 03-5782-9080	
人と、社会と、地球の未来をカタチに みらい建設工業株式会社 東京都港区芝4-6-12 電話 03-6436-3710	Achilles アキレス株式会社 東京都新宿区北新宿2-21-1 新宿フロントタワー 電話 03-5338-9200	
 東京インキ株式会社 TOKYO PRINTING INK MFG. CO., LTD. 東京都北区王子1-12-4 TIC 王子ビル 電話 03-5902-7628	 株式会社 JSP 東京都千代田区丸の内3-4-2 新日石ビル 電話 03-6212-6364	
先義後利をもって共助と自他共栄す		

国土強靱化2021
写真-3(a) 日刊建設工業新聞(2021.12.22)掲載のLRRI及び協力賛助会員の広告

気候変動への対応と地域防災

行政・企業・市民をつなぐ活動展開



一般社団法人地域国土強靱化研究所
代表理事 安原 一哉氏

気候変動対応技術 [Hard&Soft] → 創出されたビジネス展開のための協会などの設立
 政策提案 → 一般社団法人地域国土強靱化研究所 (LRRI) → ビジネス創出 & 展開支援
 インフラ強靱化・長寿命化 [Hard] ← 一般社団法人地域国土強靱化研究所 (LRRI) ← ICRT [Soft] (R: ロボット)

災害は「ワガコト」と認識する時代

【顕化するニーズ】

- 顕化する災害や気象変動の被害や被害の軽減が求められる
- 顕化する企業や技術者、政策担当者との連携が求められる

一般社団法人・地域国土強靱化研究所 (LRRI) の役割

災害顕著化、大規模化、広域性に対応する地域国土の強靱化に資する業務受託、技術開発、啓発、ビジネス支援、人材育成支援

【埋もれているシーズ】

- 民間ももともとあるもともと持っている技術や技術と高い人材力を有するシニアによる社会貢献

【事業部】
委託された課題解決による地域貢献

一般社団法人 地域国土強靱化研究所 (LRRI)

【事業部】
課題提案、技術開発、ビジネス展開

【事業部】
能力向上と開発、人材育成

LRRIの業務の三本柱

LRRIの役割

LRRIの業務の三本柱

写真-3(b) 日刊建設工業新聞(2021.12.22)掲載のインタビュー記事

③ 日刊工業新聞社からの協賛依頼

日刊工業新聞社主催、グリーンインフラプラットフォーム (<https://gi-platform.com/>) 共催のグリーンインフラ産業展 2023 (<https://biz.nikkan.co.jp/ev/green-infra/>) への協賛の依頼を受けました。

④ LRRI としての研究発表

池澤雄之介・榎本忠夫・安原一哉・半根隆巳・小暮直親・田中富智夫・北相模剛：フォームサポート工法により補強された橋梁の1G場振動台実験による耐震性評価，土木学会地震工学論文集，2021，CD-ROM.

《メルマガによる情報発信》

プル型の HP による情報発信に加えて、メルマガとニュースを配信しています。メルマガは、会員全員に毎月配信しておりますが、配信後は、会員専用ページにアップしております。また、「LRRI ニュース」はプッシュ型情報発信としてホームページの表紙部分に掲載されています。

《役員便り》

月に一度の「役員だより」を掲載しておりますので、お目通しください。なお、令和4年度は法人会員（特別賛助会員、賛助会員）の皆様にも投稿をお願いいたしますのでご協力ください。

【今後の展望】

《安原代表理事》

会員の皆様とご関係の皆様のご協力を得て、気候変動対応などの困難な課題に挑戦することによって、地域貢献とともに国際貢献も含めて、他に類を見ない“地域社会貢献型一般社団法人”を目指して参りたいと存じます。また、会員の皆様のご所有の技術の新たな展開や双方向型継続教育支援など、会員サービスを一層充実

させていただきます。

《岸田副代表理事》

会員と関係者の皆さまのご理解とご支援をいただき、LRRの教育支援部の活動をこの1年間、進めることができました。パンフレットに記載されています資格取得支援・企業研修サポート・外部組織との連携活動(セミナーの共同開催)・防災教育支援などに着手することができました。今後も、市民の自助、技術者の共助、自治体の公助を念頭に、相互理解と協働を通じて「地域の防災力向上に役立つ活動」をLRRとして進めていきたいと思っております。皆さまには、よろしくお願いいたします。

《須田副代表理事》

会員と関係者の皆さまのご理解とご支援をいただき、この1年間、LRRの事務局活動を進めることができました。ICRT技術が進む中、コロナ禍やインターネットテロ等の様々な社会情勢の変化になかなか追いつけず、会員およびセミナー等ご参加頂いた支援者の方々にご満足頂ける状況にできませんでしたこと、反省すると共に、今後の改善に取り組ませて頂きたいと考えております。特にセミナー等実施に際しての、Webフォーム入力活用の活用、メールやSNSに関するセキュリティへの対応、業務効率化のためメールでのファイル添付からファイル共有フォルダ活用やSLACK等による業務支援をご提案させていただきます。また、ICRT研究会の発足等取り組む課題が多く、今後有志の方を募らせて頂きたいですので、何卒ご支援、ご協力の程お願い致します。

【役員顔ぶれ】



安原代表理事 岸田副代表理事 須田副代表理事 岡本理事 小浪理事 田中理事 伴理事 丸山監事 霜越監事

【特別賛助会員紹介】

(株)JSP 〒100-0005 東京都千代田区丸の内 3-4-2 (新日石ビル) 03-6212-6362
<https://www.co-jsp.co.jp/>

【賛助会員紹介】

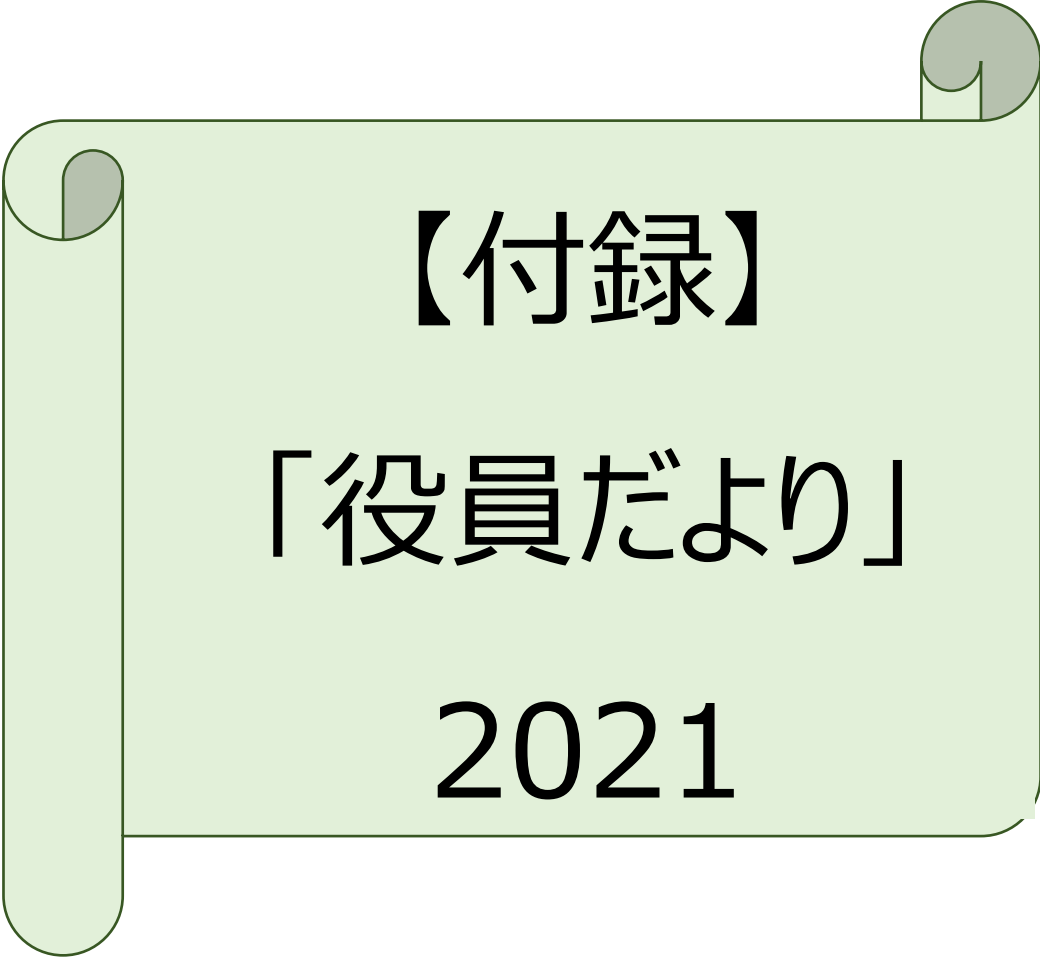
アキレス(株) <https://www.achilles.jp/> 地水開発(株) <https://chisui-kaihatsu.co.jp/>
イーテック(株) <http://www.earth-techno.co.jp/> (株)T&S 開発設計事務所
エターナルプレザーブ(株) <http://www.etp21.co.jp/> 東京インキ(株) <https://www.tokyoink.co.jp/>
岡三リビング(株) <https://www.okasanlivic.co.jp/> (株)水戸グリーンサービス <http://www.greenservice.jp/>
昭和コンクリート工業(株) <https://www.showa-con.co.jp/> みらい建設工業(株) <https://www.mirai-const.co.jp/>
(株)高萩エンジニアリング <http://www.t-hagi.co.jp/> メトリー技術研究所(株) <http://www.metry.jp/>
木材活用地盤対策研究会 <https://mokuchiken.com/>



一般社団法人 地域国土強靱化研究所

ホームページ <https://lrri.or.jp>
〒311-0105 茨城県那珂市菅谷 4527
お問い合わせ staff@lrri.or.jp





【付録】

「役員だより」

2021

熱海土石流を考える

2021年7月3日の午前、また起きてしまった大規模土砂災害“熱海土石流”。またしても、“これまでに経験したことのないような災害”。しかもそれは、皮肉なことに、法人の1周年記念フォーラムを開催の日の出来事だった。これまでに、毎年のように起きる同種の災害に関してはたくさんの調査が行われ、たくさんの調査報告や研究が蓄積され、多くの論文が出版されているのに、役に立っていないのではないかと筆者には思える)というこの無力感。“一体、過去の経験や教訓はどう生かされてきたのか?”とまたしてもその疑問に突き当たる。それは、関係者に向けられているのと同時に、もちろん自分にも向けられている問いではある。とりわけ、研究者を自認している人には、微力であってもこれに答える責務がある。なかでも、国民の税金を使って研究している、という意識のある人については、自らに問いかけ、答える義務がある。

今回の災害は、まだ、調査中であり、不明の方々の救出作業が終わっていないので、原因、メカニズムや責任の所在など細かい、そしてデリケートな側面への言及は現時点では避けるが、工学的な立場からは、今までの土砂災害とは異なる側面があるのでそのことを指摘するにとどめたい。

今回は、甚大な災害でもあるにもかかわらず、マスコミの常套句である“想定外”という表現はほとんど見られない。筆者は日頃から、少なくとも技術者・研究者はこのような表現はやたらに使うべきではない、と主張しているので、それはそれで安ど感はあるものの、逆に考えると、“想定内のことであった”とするなら、なぜ“事前対応”ができなかったのか?それは、過去の経験や教訓を生かし切れていないことの証左ではないか?そう考えると責任の所在の一旦はどこにあるのか?が見えてくる。

さて、学術的な立場で振り返って見ると、“土石流”という課題は、“水の中に土石がある”というどちらかという流体力学(土木的には水理学)的なとらえ方が主流であったように思える。ところが、今回は、マスコミは、知るか知らずか、“土石の中に水がある”という立場の地盤工学の専門家を中心に意見を求めている傾向がある。つまり、前者は、土石流を流体としてとらえているのに対して、後者は、土石流を固体(あるいは、粒状体)としてとらえる。したがって、メカニズムを考え予測をするときには、両者で手法が異なるため、おのずと結論は変わってくるのではないかと想像される。この辺の議論は学術的には重要である。例えば、後者においては、“動く”,あるいは、“移動する”,という概念はあっても、“流れる”という概念はない(あるいは、最近になって出てきたが、それより以前は長い間なかった)と考えると、前者との接点はないのではないかとなどである。

面倒な議論は今後にゆだねるとして、マスコミ報道でもう一つ気なることがある。それは、“盛り土”という表現である。学術的には、“盛土”と書くが、「広辞苑」(第4版,第7版)ほ

かの辞書を見ても、“盛り土”はあっても、“盛土”という語はない。“盛り土”についても、読み仮名は、“もりつち”と“もりど”と両方ある。この辺は、専門の立場からは、歯がゆい思いがある。なぜなら、“地盤沈下”や“液状化”は、マスコミ用語も専門用語も違いはない。ならば、“盛り土”は“盛土”と表現して、“もりど”“とよぶことにできないのだろうか。

さらに、飛躍ついでにもう一言。マスコミは、“砂”と“泥”という表現を使う。しかし、地盤工学を専門にしている立場からはこれも受け入れられない。土は砂と泥から成っているのではない。少し大雑把だが、“礫”、“砂”、“シルト”と“粘土”から成り立っている、と言わせてほしい。したがって、マスコミの言う“泥”とは、専門の立場からは、“シルト”と“粘土”あるいはそれらの混合物を指しているものと思われる。それに、“泥”という表現はあまりいい意味を伴わない。例えば、泥沼、泥縄、泥棒、泥臭い、などなどである。シルトや粘土の力学を対象にしている人は泥の研究をしているわけではない。ただ、なかなか認知は行き届かない。昔、若いころ、ある大学の学長から専門は何かと問われたときに、「土質力学を専門にしています」と答えたら、「泥が研究の対象になるとは知らなかった」と言われた。

またまた、飛躍するが、IPCC AR5 の Review Editor をしていた時に、ある会合で、社会学の専門の外国人から同じような質問を受けたので、“Geotechnical Engineering”だと応えたら、それは、Geology の一部か、と聞かれてがっかりしたことがある。ことほど左様に、地盤工学の認知は、地球環境分野ではまだまだである。ただ、残念なのは、多くの地盤工学を専門にしている研究者・技術者はこのことを認知出来ていないように見えることである。

さて、横道にそれてしまったので、もう一度、“熱海土石流”へ戻ろう。令和2年度から3年度へかけて、茨城地裁から、他県の県庁所在地で生じた降雨による斜面崩壊の意見書作成を要請された。死者が出たというデリケートな事件であるうえ、事前調査のデータがない、という状況なのに、求められたことは、①斜面は盛土だったか切土だったか、②仮に盛土であったとしたときに、盛土の安全高さはどれくらいか（事後の調査からは、高さ7m、傾斜角35°であったと推定されるが、この高さは妥当だったのか）、③事後の調査から、事前の状況を類推出来るか、などの甚だ難しい疑問に適切に答えて意見書を作成することであった。この例にもれず、一般的に我々土木技術者は、データがないと判断できないし、適切に疑問に答えることができない。したがって、事前調査とそれに基づく事前対応がなによりも求められることである。筆者が主張する“事後対応から事前対応へ”ということの意義はここにある。今回の“熱海土石流”災害もこれに該当するように思えてならない。

“この悼^{いた}み 折りに変えるだけなのか

今年も続く 未^み曾^{ぞう}有^うの悲劇“

代表理事 安原一哉 (2021年7月13日)

「役員だより」2021年8月号

役員だより 7月号 「熱海土石流を考える」雑感

「土・石」については多少の知識はありますが「流」という水が合わさった現象については私の拙い知識では何かを述べることは出来ません。

しかし、以下の様に感じています。

役員だより 7月号「熱海土石流を考える」で、代表理事の言われる『これまでに、毎年のように起きる同種の災害に関してはたくさんの調査が行われ、たくさんの調査報告や研究が蓄積され、多くの論文が出版されているのに、役に立っていないのではないかと筆者には思える)というこの無力感。

"一体、過去の経験や教訓はどう生かされてきたのか?"とまたしてもその疑問に突き当たる。」という思いに深く考え、勉強をさせていただきました。

基本留まっている「土と石」はどこにも行きません。

しかし、「水」は、形が無く、時に飛び跳ねることはありますが、高いところから低いところに流れ・移動する単純な「もの」です。

しかし、大量の水が移動する時は、その流れや力は侮りがたく、自分にとって最も都合の良い所に形を変えて移動し、土を削り、土を押し流し、土の抵抗力をなくしながら、最も低いところまで流れて行って形が安定するまで移動を続ける様に思えます。

大きな自然の力に対しては、どうにもできないところもありますが、それでも何か「見過ごしている所もあるのではないかと感じています。

水は高いところから低いところに流れる。

そして、時にその流れによって周辺環境を変えながら水みちを変化させることがある。

しかし、それでも、水は低い所に流れる。

まず身近な地域で、降雨範囲や降雨量によっても大きく変わることがあり、必ずしも簡単なことではありませんが、

- 1.水が集まる場所はないか？
- 2.水が浸透する場所はないか？
- 3.斜面や法面に亀裂はないか、新たな湧水はないか？

等、安全な範囲で出来る限り水の流れを事前に確認しておくことが必要と感ずります。

近年は、AIによる地形把握が出来るので、それらがより力になるように思います。

最後に、今回の豪雨で災害を受けた皆様に心からのお見舞いと、一日も早い復興をお祈り申し上げます。

2021年8月12日
LRRRI 理事 岡本 昌弘

二人の中村医師

オリンピックの興奮が冷めやらぬ間に、パラリンピックの報道が毎日続いています（この原稿を書き始めたのは、9月1日）。そのせいか、高校野球やMLBの影が薄くなっていたようにも思えます。1964年の東京オリンピックの際のパラリンピックの記憶が定かではないのですが、どの競技を見ても驚くばかりで、人間の可能性を再認識させられるとともに、選手や関係者の皆様のご苦勞が想像されて胸が熱くなることがしばしばで、同じ競技種目でも、オリンピックとは異なる競技を見ているような錯覚に陥ります。

世界で、“パラリンピックの父”と呼ばれているのは、ルードビッヒ・グッドマン（Ludwig Guttman）博士（ドイツ生まれの英国人 1899年7月3日～1980年3月18日）であることはよく知られていますが、同博士の下で学ばれた中村裕博士（1927年3月30日～1984年7月23日）は、日本における“パラリンピックの父”と呼ばれており、1964年の東京オリンピックでは、選手団長をされたと知りました。のちに、著名な作家や大手企業の援助のもと、身障者には「保護より働く機会を」をスローガンに、大分県別府市に「社会福祉法人 太陽の家」を設立されました。この辺の経緯は、NHKドラマ「太陽を愛した人々」（主演・向井理）に描かれています。ビートルズ世代の筆者には、同じ時代に生涯をささげ社会貢献をされた博士のことを“そういわれ見ると・・・”という程度の記憶ですが、今の若い方々は、ビートルズを知っていても中村裕博士のことはきっとご存知ないでしょう。この機会にぜひ知っておいていただきたいものと思います。

もうひとりの中村医師は、中村 哲博士（1964～2019）です。同医師のことを知らない方はおられないと想像します。今、筆者の手元に、中村哲著「天、共にあり」（NHK出版、2013）という本があります。ここには、幼いころは昆虫学に憧れていた筆者が医学部へいき、医者になったのに、なぜ、アフガニスタンという未知の国の井戸を掘る土木技術者になったのかがわかりやすく書かれています。共感する部分が多くありますのは、“医師、井戸を掘る”ということだけでなく、アフガンで井戸を掘ることに至った思いに共鳴するからでした。クリスチャンである博士の“困っている人を命がけで助ける”という高邁な精神には、ただただ、敬意を表する以外に言葉が見つかりません。読み進めば進むほど、博士の見識には、驚嘆するばかりですが、土木技術の原点はここにある、という思いにもかられます。アフガニスタンの人々に敬意を以って迎えられていた博士ですが、最近の政権交代で、アフガンに造られた博士の肖壁画が塗り潰されたというニュースに接して悲しい思いに駆られている方も少なくないでしょう。

2001年9月11日の、世界を不安定に陥れる引き金になったアメリカにおける“同時多発テロ事件”は、まさしく、国際的テロリズムの発端の時、さらに言えば、“世界が変わった日”ではないでしょうか。皮肉なことに、9.11は、筆者の誕生日でもあります。この日になるた

びに、筆者の胸はつぶれるばかりですが、アフガンの現状と中村医師の思いを考えますと、もはや言葉を失うばかりです。

ことの結末は、両中村博士で異なりますが、両博士に共通する、困っている人のために何ができるのか？という想いを、今年も迎えた誕生日を機会に、もう一度原点に据えたいと思うのです。

【付記】

例によって、すこし横道にそれますが、アフガニスタンについては思い出すことがあります。1979年アメリカのイリノイ大学アバナー・シャンペーン (University of Illinois at Urbana-Champaign) 校に留学した時のことです。大学での研究生活が始まって間もないころに、受け入れ教授のメスリ教授 (Professor Reza Mesri) と一緒にイリノイ州の隣のインディアナ州にあるパデュー大学 (Purdue University) のレナーズ教授 (Professor Gerald A. Leonards) を訪問しました。大学の教員専用のレストランで食事をしたときにレナーズ教授の前に座られました。会話の途中、質問を受けたのですが、緊張のあまり、聞かれたことを十分理解できないまま、"yes" と答えた途端、一緒にいた皆さんからどっと笑いが巻き起こりました。あとで分かったことですが、その時のレナーズ教授の質問は、“ソビエトがアフガニスタンに侵入してきたので、日本も危ないと思ってアメリカに逃げて来たのか？”という教授独特のジョークだったと聞きました。1979年当時、アフガンに軍事侵攻した旧・ソビエト連邦 (現・ロシア) に対して国際的な非難が集中していたという国際的な背景がありました。この時の教訓は、“聞き取れない”あるいは“わからない”ときには、やたらと、“yes”と言ってはならない、ということで、長く教訓にしています。

レナーズ教授は地盤工学分野では大変著名な方 (1962年に McGraw-Hill から出版された古典的名著 Foundation Engineering の編者) であることに加えて、土質力学の始祖である、カール・テルツァーギ教授 (Professor Karl von Terzaghi) の名前を冠したアメリカ土木学会の Terzaghi Lecture の第16回 (1980年) 目の講演者でした。講演のタイトルは、Investigation of Failures ((地盤の) 崩壊の調査) です。パデュー大学では、2003年以来、彼の名を冠した"Leonards Lecture"を毎年開いています。不思議なことに、1979年に初めてパデュー大学を訪問して以来、レナーズ教授からは何かにつけ声をかけて戴きご指導いただきました。如才ない人柄で、尊敬すべき先人のおひとりでしたが、残念ながら、1997年、大学の同僚とテニスの途中、急逝されたという連絡を受けました。今の筆者の年齢よりは若い年齢でのご逝去でした。

“厄介な 病の中の バースデイ
嬉しくもあり 嬉しくもなし“

(令和3年9月18日 代表理事 安原一哉)

CIVIL の裏方，日本の土台を新しく，岡三リビック

岡三リビックは安原代表理事から LRRi 設立構想のお話をいただくと早々に、LRRi 設立とともに法人会員となりました。ここに至った経緯は広いようで狭い業界の中で、薄いようで濃いご縁があつてのことと感じており、安原代表理事とのご縁と岡三リビックの歴史を紹介したいと思います。

昭和 46 年に「コルゲートパイプ」の専門商社として産声を上げた「岡三興業株式会社」は、“買い戻しリース”という新しいビジネスモデルのもとで、コルゲートパイプを仮設水路として普及促進させ、同時に集水井やトンネル内巻きに適用されていた「ライナープレート」にも大いに係わり普及させました。当社の創成期において、下水道工事が盛んになり始めた昭和 51 年、推進工法の発進立坑として円形ではなく、“小判型ライナープレート”を独自に開発して当社の看板商品と育て上げました。そしてこれをバネに、日本の高度成長期とともに鉄鋼商品であるライナープレート・コルゲートパイプ関連で業界トップの座を勝ち取ることができました。

その後、昭和 58 年に鋼製補強材を用いた「多数アンカー式補強土壁」を福岡正巳先生の指導のもとで実用化することに成功し、鋼材商社に留まらず、工法メーカーとしての一面を備えた企業として拡大期を迎えます。福岡正巳先生には事業開始した後も「多数アンカー式補強土壁」の定期的に技術的助言をいただき、技術に向き合う熱い想いを学ぶことができました。そして昭和 59 年、英国において「ジオグリッド」に出会った当社は、昭和 60 年にジオグリッドの販売代理店としてジオグリッド補強土工法を新たにラインナップに加えました。これが当社のジオシンセティックスとの係わりのスタートであり、昭和 61 年から国際ジオテキスタイル学会（現 IGS）に正式加盟しました。さらに、この同じ年、当社は EPS 工法の日本への技術導入を目的とした調査団に加わり、技術の発祥地であるノルウェーを訪問して、発砲スチロール工法開発機構（EDO）の設立時から参画することとなりました。実はこのノルウェーの地には若かりし安原代表理事が留学されており、日本への EPS 工法の技術導入を後押ししていただいと伺っています。

その後も多くのジオシンセティックスを商品ラインナップに加えて、設計や施工にも応えられる全国をカバーする土木資材商社として成長することができました。そして、平成 11 年に社名を「岡三リビック株式会社」に変更して企業イメージの刷新を図りました。社名のリビック（LIVIC）という単語は、CIVIL（Civil engineering＝土木）の逆読みした造語ですが、土木業界を下から支えるという強い意思が示されたものです。さらに、LIVIC は「Leading Innovator for Value Added Infrastructure and Creativity（価値あるインフラ整備と創造性の旗手）」の頭文字を連ねたものとなっており、当社のスローガンともなっています。

2021年令和3年6月、岡三リビングは創業50年を迎えました。ここに至れたのは、お客様である施工会社、建設コンサルタントをはじめ、関係する協力会社、技術の裏付けを与えていただいた学術・研究機関の方々のお陰様と存じます。そしてこれから次の50年に向けて、LRRと共創、NEXT50 Change & Challenge を掲げて、変化への適応、新たな挑戦を続けて皆様とともに発展して参りたいと考えています。

2021年10月4日

LRR 理事 小浪 岳治

日本の土台を新しく。



岡三リビング株式会社

魅力度ランキング

過日、某調査会社による、全国47都道府県の“魅力度ランキング2021”なるものが公表され、マスコミが挙って取り上げるおかげでチョットした話題になっています。例年のことですが、茨城県は、最下位争いをしている、昨年は最下位を脱出したものの、今年はまだ逆戻りしました。

これに対して、大井川知事は冷静で、歯牙にもかけない、という毅然とした態度でしたが、その姿勢は評価すべきと思いました。

そもそも、地域の魅力度ってなんだ？何を尺度にするの？などなど不明確なところが多く、批判も聞かれます。単純に考えれば、“行ってみたいかどうか？”、“住んでみたいかどうか？”によって決まるような気がします。明確に言い表せないような雰囲気もあって、定量化はむづかしいように思います。

人間についても同様で、外面的と内面的な評価の尺度があるのでしょうか、“魅力的な人ってどういう人？”と問われると、好きか嫌いかと同じように、一言で表現するのはむづかしくないでしょうか？

仮に、“地域の魅力度を上げたい”と思われる方がいるとして、個人的な体験から一つだけお伝えしたいことがあります。

筆者は、幸か不幸か長い人生の中で幾度か住まいを変えてきました。茨城で生まれ、福岡で育ち、また、茨城へ戻ってまいりました。その間、アメリカ（イリノイ大学アバナー・シャンペーン校）とノルウエー（ノルウエー土質工学研究所(NGI)）に年単位で過ごしました。また、短期間ですが、JICA派遣による専門家として、メキシコにも住みました。つまり、国内では、西日本と東日本での生活を、海外では、アメリカとヨーロッパでの生活を経験したことになります。言葉も日本語以外に、英語、ノルウエー語とスペイン語に接することができました。職業は大学教員しか経験がありませんが、西と東の大学も、そして、私立大学も国立大学でも教員としてほぼ同じ年月を費やしてきました。そういう拙い経験の中から考えますと、「どこに行きたいか？」と問われると、行きたいところはまだまだたくさんありますが、「どこに住みたいか？」と問われると、きっと、「特になく、どこでも楽しく生きていけます」と答えると思います。

このような経験から言えることは、もし、自分の住んでいる地域のランキングを上げたいと思うなら、いったん住んでいるところを離れて、離れている地域から住んでいる地域を眺めてみる、ということをご提案したいと思うのです。そこから地域の魅力度を上げる知恵が生まれてくるものと思っています。

筆者は、北九州に置いていた父母の墓を、定年後日立に移しました。育った北九州&福岡には強い思いはありますが、根拠の希薄な事項に基づいた意味のないランキングとは無関係に、この地を愛していますので、この地で骨をうずめようと決めました。

“来し方に 悔いはなしとは ごちたれど
廻るは遠い 折々のこと”

代表理事 安原一哉（令和3年11月1日）

【ウミガメ食べたことありますか？】

唐突ですが、皆さんはウミガメを食べたことがありますか？もしくは、食べれるところは御存じですか？その前に、え？食べていいの？という方がいらっしゃると思います。私も『亀、食べる？』と友人から聞かれたときに思いました。そして、私はウミガメを食べたことがあります。

その場所とは言いますと「東洋のガラパゴス」と呼ばれる大自然(世界自然遺産)があり、東京から南に 1,000km、飛行機の発着がなく、船に 24 時間乗らないとたどり着けない場所の小笠原です。

私自身、小笠原との接点は仕事上繋がりあり(+α趣味の魚釣り?)大好きな島の一つでもあります。

小笠原では、ウミガメ(アオウミガメ)を食べています。世界のいろいろな地域でアオウミガメは食べられてきました。(アオウミガメという名前は、脂肪が青いところに由来しています)。

昔は小笠原では南の島の貴重なタンパク源として、ウミガメ漁が盛んに行われ、昔からウミガメが食べられてきました。小笠原の人達にとってはローカルフードなのです。今では、保護をする一方で、ウミガメを食べるのは島の伝統文化なので、漁の期間と捕獲頭数を決めてウミガメを捕っているそうです。(現在、友人の話では亀漁師が数人いるそうです)

味とは言いますと、刺身は淡白で癖のない味です。他は内臓の煮込みは力が漲る味?がします。私の子供たちも小笠原に行ったときは、美味しいと言ってはよく食べてました。

このウミガメを保護するために小笠原では、色々な努力をしています。母ガメの産卵が安心できるようにと砂浜の整備や(街灯の光の方向など)、海岸で産み落とされた卵を回収し、人工ふ化させて育てたりしています。島の子供たちに対しては環境教育などを行っているそうです。

私自身も釣りをするために小笠原では知人のボートで海に出ますが、その時に海洋に浮かぶゴミを見つければ、拾うようにしています。島のどこに行ってもゴミが落ちているのは殆ど見ません。

基本、島の人たちは自分たちの島という意識が高く、当然のごとく海や自然を大事にしているのがとても強く感じられます。島に限らず、どこの地域住んでも同じ気持ちでいられたら、素敵なことだと思います。

この様に自然を大事にする心と、人々が住みやすくするためのインフラとの共存が今後さらに考えなければいけないと思います。

「地上の星」と「地中の星」

「地上の星」は言わずと知れた中島みゆきの名曲です。この曲はNHKの「プロジェクトX～挑戦者たち～」のテーマソングとしても使われていたことはつとに知られています。

NHKの「プロジェクトX～挑戦者たち～」は、残念ながら事情があって2005年末を以って打ち切られました。無名の戦士に焦点を当てたドキュメンタリーを伝える精神は、皆様もご承知のように、翌年1月から放送を開始した『プロフェッショナル 仕事の流儀』に継承されています。

「地上の星」～ヘッドライト・テールライト～の歌詞をよく読んでみますと、下から目線で底辺にいる人たちへのメッセージのようにも読めます。それは社会を支えるインフラの建設・維持・管理に関わる土木技術者の思いにも通じるようです。そのことは、2002年第53回NHK紅白歌合戦の時の映像が如実に物語っています。青函トンネルの現場から送られてきたシーンは思わず目頭が熱くなるくらい感動的であったと記憶しています。

一方、「地中の星」は、読まれた方もおられると思いますが、門井慶喜著の最近の小説です。“地中の星”とは、地下鉄建設に情熱をかけた早川徳次と彼らを取り巻く人物たちのことで、作品の内容はわが国最初の地下鉄建設の壮絶な戦いと葛藤とロマンが独特の筆致で描かれています。個人的には、土木技術者必読の書といえそうな気がしています。中でも、早川徳次（東京地下鉄道(株)創設者、後の東京地下鉄(株)）と五島慶太（東京高速鉄道(株)創設者、後の東急グループ創始者）の経営者としての戦いは壮絶で驚嘆するばかりです。

実は、この「地中の星」を知ったのは、筆者の好きな女優の一人の中江有里がテレビのある書評番組で紹介されていたからでした。中江有里は昔、NHKの「週刊ブックレビュー」という番組で故・児玉清のアシスタントをしていたころから、なかなかの読書家として知っていましたが、本書のようなあまり華々しくない、どちらかという地味な作品にも目を向けられていることに改めて敬服しているところです。

中島みゆきの音楽と門井慶喜の文学という違った領域から、異なる視座に立ってプロフェッショナルを描いているようですが、創作者の意図があったかどうかは別にして、土木技術者への讃歌という点では共通していると筆者は感じています。

土木技術者の苦闘とロマンを描いた小説としては、「高熱隧道」（吉村昭、1967）や「無名碑」（曾野綾子、1969）をはじめとして幾つかありますが、映像化されたものとしてよく知られているものには、「黒部の太陽」（1968年、日活、原作・木本正次、1964）や「海峡」（1982年、東宝、原作・岩川隆、1982）などが代表的なものとしてあげられます。“大災害時代”として土木技術者の役割が再認識されつつある今、「地中の星」もぜひ、映像化してほしいものと密かに念じています。

“あこがれは 今や儚く 消えたれど
想いは続く 物書きの道”
(代表理事 安原一哉)

初めての「岐阜」

新年明けて、そろそろ正気に戻って来た1月20日木曜日、生まれて初めて岐阜市を訪れました。名古屋駅を夕刻出発、JR東海道本線大垣行新快速で20分ほどで岐阜駅に到着、新宿から「あずさ」に乗っていく甲府のイメージでしたので近さに驚きました。訊いたところ、名古屋の会社に勤務の方は岐阜のマンションを購入される方も多く通勤圏なのだから。県民の皆様、大変失礼致しました。コロナ禍で、あちこち観光がてら行くことは叶わず用事があるのは翌日1件、ご案内頂く昭和コンクリート工業さん（「フォームサポート分科会」メンバー）にせがんで早速夕飯へ。駅の商店街を歩いていくと『馬喰一代』と書いてあるお店の暖簾をくぐり、馬??、そんなことはなく飛騨牛の店で霜降の皿に札が添えてあり肉名を明記して出す高級店。雰囲気ありすぎの上美味しすぎてどれか確認もせずぺろりと食べました。仙台に縁のある私ですがこんなに美味しいタンも食べたことがない、いきなり至福の時を赤ワインとともに迎えた岐阜の初夜でした。

さて今回の目的は、昨年末エルリでインフラの老朽化対策工法を社会インフラテック展に出展した際、模型が無く少々寂しいブースとなった反省から模型屋さんを紹介頂くことでした。翌日1月21日の朝、岐阜駅そばから車に乗せて頂き30分ほどでしょうか、川のほとりの会社に到着しました。土木業界にはいない爽やかな雰囲気でお迎え頂きましたのは『和模型工房』小山社長、柔らかな口調から説明頂いたのは…ガンプラ世代には堪りません、ジオラマ初めホワイトベースの機内にありそうな工業用マシンは外見のみならず、動く動く。“身体で覚える”がパワハラな今、企業では和模型さんに工場内の装置を再現してもらいミニチュアで作業を覚えるのだそうです。伊勢志摩サミットの国賓のお土産は人工衛星、もちろん和模型さん製作、精巧なものを同じように何台も作れるのはすごい、ちなみに環境省から受けた仕事だそうです。鉄道展のJR・・・切りがなくなりそうですのでこのくらいで。腕前にすっかり惚れ込みフォームサポート工法の資料を手渡し見積をお願い致しました。来年度の展示会には間に合うと思いますので出来栄をご期待ください。その日もすっかり昭和コンクリート工業さんにお世話になり岐阜駅まで送って頂きがてら最後に、岐阜の有名なお菓子屋さん『養老軒』が期間限定で岐阜駅に出店していることを教わりました。早速、すごっ、苺だけではなくバナナ・他にも何か1つの大福に入ってる。しかし、残念ながらほとんどが生ものため賞味期限が短くて帰社後同僚が不在であれば月曜日までもたないな、待てよ、職人さんが毎朝小豆の声を聴きながら作っている餡を使用した『ごろごろ栗のどら焼き』これは月曜まで大丈夫のよう。購入して東京へ。事務所で食べました、うまい！栗と餡子がこんなに相性いいなんて。さすが栗きんとんの岐阜です。ありがとう、岐阜！そして昭和コンクリートさん（本社 岐阜県）には2日間もお付き合いいただき感謝、感謝。

それからほどなくして、オミクロン株が幅を利かせたどこにも行けない日々で読書でもと[新版]日本国紀 百田尚樹著を読み始めると織田信長が天下統一を目指すようになった頃を推測するくだりで岐阜が出てきてビックリ。信長は尾張と美濃の一带をほぼ支配下に置いた頃（1565年）城下町「井ノ口」の地名を「岐阜」に改めたそうです。岐阜は「周の文王が岐山より起こり、天下を定む」という故事にちなんで命名したそう（阜は山と似た意味）。それが信長の野望

を示すとのこと、うらやましくなる県名の誕生秘話、そういえば駅前に信長の像があったことを思い出しました。ご存じの通り信長は本能寺の変で明智光秀に49歳で討たれてしまいます。ただ英雄が若くして旅立つ夢幻もいいですが、450年もの間、街を守りインフラを維持し造り替え、長寿命化を図り現在も同じ名前でも県名になっていることは人間が作り出す現実の業としてロマンを感じませんか。私はエルリの活動を通じてインフラの長寿命化にチャレンジしていることに妙にワクワクしてしまいました。関係ないですが私、たまたまこの2月で50歳になります。長生きだけは信長に勝ったようで・・・。

“人間五十年、下天のちを比ぶれば、夢幻の如くなり”
(理事 田中富智夫)

震災記念日

2021年は、2011年の東日本大震災から数えて10年目の節目でした。いくつかの場所で記念イベントが計画されていたと記憶しています。大学でそのような案内メールが届いたときに、震災の記憶を呼び起こし、得られた教訓は生かされてきたのか？を考える機会を、“記念”イベントと称するのは見識にかけるのではないのか？という意味のメールを発信しました。1997年の兵庫県南部地震後に震災に関するイベントに“記念”というかむりをかぶせた行事に対して、住民からクレームがついたことから、それ以来マスコミは、震災記念という用語は使わないことにした、という報道を目にしました。そのためか、2011年以後でも、マスコミの報道にそのような表現は見当たらないようです。NHKの放送用語の解説では、

放送では、悲惨な出来事や災害(震災)などが絡んだ節目の日には、原則として「～周年」という言い方はしないで、「～から〇〇年たちました」のように表現を工夫しています。

とあります。見識のある判断だと思います。

大学でのオンライン上の議論の中で、併せて、Anniversaryと銘打つのも適切ではないのでは？という思いも付け加えました。ただ、これは、筆者の認識不足で、Anniversaryについては、Anniversary of birth（生誕記念日）もAnniversary of death（死亡記念日）もあることを知らされて少し反省をいたしました。ただ、“生誕記念日”はいいとして、“死亡記念日”というのは、日本語の感覚としてあまりなじみ良いものではないのではないか？と思うのですがどうでしょうか？関連して、“終戦記念日”はあっても“開戦記念日”というのは聞いたことがありません。ただ、終戦記念日についても議論があり、NHKは、「終戦記念日」を「終戦の日」と表現しているようです。

記念日に関連して、x x周年という表現がありますが、1997年に兵庫県南部地震に見舞われた兵庫県では、「記念」とともに、阪神淡路大震災の遺族の方に配慮するという形で2014年からは「周年」という文字を用いないことを決めたとのこと。「周年」は、本来、慶事にも弔事にも両方に使われるものですが、主に慶事に用いられると仮定すると、震災10周年記念日というより、震災10周忌（今年は11周忌ですが）ではないか？という気がしますどうでしょうか？

要は、研究機関や関連学会の災害に関連するイベントが被災者の立場に立っているのか？という問いに答えられていることが必須で、そのことが被災者に伝わるのが重要であると考えています。このことが災害を“ワガコ化”，そして，“ワレワレゴト化”されることにつながるものと信じています。

「サラダ記念日」（河出書房新社，1987）でデビューした歌人・俵万智さんは、2011年の東日本大震災の後、沖縄県へ移住（現在は、宮崎県在住）されたことで種々批判をあび

“子を連れて 西へ西へと 逃げてゆく 愚かな母と 言うならば言え”（1992，毎日新聞社）と詠まれています。結果的にご本人なりの“ワガコ化”になったのではないかと筆者は理解しています。

“あの無残 忘れたいけど 忘れぬ

寄り添うころ ただひたすらに”

（代表理事 安原一哉）

昭和から平成、そして令和へ

“人に出来ないことが出来なくてもいい。誰でも出来ることを確実に成し遂げていくことが大事なんだ。”

これは、最近観たテレビドラマの中で耳にした言葉です。中間管理職が新入社員研修で語ったものだったと記憶しておりますが、なかなか良い言葉だと思いました。

現代は、それこそその凄いスピードで社会構造が変化しています。昭和の時代の小学生だった頃、「ウルトラセブン」の地球防衛軍隊員が手にしていた腕時計型のテレビ電話を憶えておいででしょうか。あの頃はいつになったら本当にこんなものを手にすることが出来るんだろうと、自分が生きている間には実現することはないであろう未来に憧れていました。パーソナルコンピュータ等の歴史はどのくらいの速度で変遷していったのでしょうか。

- ・昭和30年代～40年代：そろばん（計算尺もありました）
- ・昭和40年代後半～50年代前半：発光ダイオード式電卓、タイガー計算機
- ・昭和50年代後半：たたみ一畳程の場所を占拠した初期の「IBM電算機本体」
- ・昭和50年代後半～60年代前半：8～16ビットパソコン（この頃から個人で保有し始めた）
- ・昭和60年代前半：ワードプロセッサ（パソコン機能の付いていない専用機）

etc.

平成に入ってから技術革新は加速度的に早くなって、もう追いつけません。ただ何となく憶えているのは、平成初期にパソコン機能がどんどん大容量化・モバイル化（小型化）していったにも拘らず、OSにも余分な機能が付くとともに計算ソフトも複雑化（欲張り化？）し、容量が大きくなった割には正比例で高速化していかなかったことに不満を感じたことです。現在ではほとんどの人が、「ウルトラセブンの腕時計型テレビ電話」を「携帯電話：スマホ」として持ち歩き所有しています（もっと多彩な機能付きで）。通勤電車の中では7～8割以上の人がこの必須アイテムの画面を食い入るように直視し、これを見た時代遅れの私としては、“なんか、結局のところ時間が動いてないなあ・・・！”と奇妙に感じたものです。

こうしてみると平成（これは日本でのみ通用する暦ですが）の30年余りは、あらゆる意味で大きな変革をもたらした時代と云えます。ただしこの時代、物質文明は巨大化・肥大化したものの、それを制御する筈の「人の心」も同様に醸成されたのでしょうか。私にはこの時代に人類が自らをも制御することを放棄してしまったように思えます。『抑止力』というご都合主義的な文言の裏に隠れて、ほとんど使用することのない“巨神兵”（映画「風の谷のナウシカ」の中に登場する）の開発・保持などはその最たる例であると思います。最近のテレビニュースの始まりは、某国での戦闘で無残に破壊された市街地や失われた尊い命を悼むものばかりです。わが国では自然災害によってもたらされた被災地の報道はあっても、人が自らの手で破壊したインフラを見ることはまずありません。一刻も早い平和が戻ることを祈るばかりです。

話は変わり私事で恐縮ですが、所属する会社が一昨年5月に新社屋に移転しました。その折に多くの関係者の方から新社屋落成祝いに花をいただきました。ほとんどが見事な胡蝶蘭です。その胡蝶蘭は一カ月程社内に飾られた後、希望する社員に分与され、私もそのご相伴に預り、割と大きな鉢を自宅に持ち帰りました。ほとんど植物には興味のない私ですが、家内は図書館・ネット等で熱心に育て方を調べ、水のやり方、日光の当て方に日夜奮闘しておりました。

我が家に来た胡蝶蘭は実は三株が一鉢にまとめられたもので、それを三つの鉢に分けて育てました。昨年3月、そのうちの一株だけに蕾ができ、ついに待望の花を咲かせました。最終的には最初の開花から約一月半後に10個の花を咲かせ、私のような花鳥風月には凡そ程遠い志向のものに対しても“心を和やかに”させてくれました。そして今年は何と三株とも2月頃から蕾が付き初め、4月7日に最初の開花がありました。嬉しいものです。植物にこれほどの感慨を持つ自分にもびっくりしています。

齢を重ねるとともに経験値が上がるのは当たり前ですが、自らを振り返ればやはり階段は一步一步上がってきたのだということを忘れがちです。人は常に現在から過去、あるいは未来を見ていることがほとんどで、過去の自分から現在を見る、ということはなかなか無いように思います。

そして冒頭の言葉ですが、まずはやるべきこと＝基本として修得しておくこと、を確実に成し遂げるようにしてから次のステップに向かうことが肝要であるということを思い出しました。どんなに時代が便利になったとしても、それはワープしてそうなったのではなく、弛まぬ努力の賜物であるということを忘れてはいけません。もっとも、昭和を生きた人には今の物質文明が必ずしも便利な物であるとは言い難いのですが、平成生まれ・育ちの人たちには、例えば“スマホ”は当り前のアイテムであり、特に凄いものではないのだと思います。

“昭和の頑固爺い”が“令和の好々爺”として、L R R Iの社是である、「先義後利」を以って“共助と自他共栄”を目指し、自然と共生しながら「国土強靱化」の一助となりたいと考えております。



“昭和は遠くなりにはけり、否、昭和の魂は未だ心の根っこに息づいている“

(理事 伴 夏男)

『思いやり』って難しい？

コロナ感染者数が第6波のピークを過ぎ、減少傾向を示したのかと思っていたところ、GWの前年比数倍の人出箇所多出の影響なのか、GWが終わると前週比増の報道である。そういえば通勤電車の乗車人数もコロナ前に比べ若干少ない程度で、通勤時間帯はかなりの混雑が戻ってきている。リモートワークが定着し在宅勤務者が多くなったと言われるが、やはりそれは一部に過ぎず通勤ラッシュが経済に先行して戻ってきたのかもしれない。

4月某日の朝、通勤電車での出来事。かなり乗降客の多いJRの某駅から電車に乗ると、次の駅で運良く私が立っていた目の前の座席の客が降りて、珍しく座ることができた。スマホに目をやりながら数駅通り過ぎ、ふとスマホの画面から目を離すと目の前に三十代（？：マスクを着けているので判断が以前に増して難しい）と思われる、若干“お腹が膨らんでいる”と思われる女性が立っているのに気が付き、“マズイ！妊婦さんだ。席を譲らないか”と思い、慌てて「すみません、気が付きません。どうぞ」と言い訳がましい言葉を発しながら立ち上がり、席を譲ろうとしたところ、その女性はこちらの意を察したのでしょうか「いいえ違います。ただ太っているだけです。」と言い、座ろうとしません。「あっ。それは失礼しました。」と謝りながら（結構恥ずかしい思いで）再度座った。座りながらその女性の左手薬指を見ると指輪をしておらず、持ち物を見まわしてもマタニティマークは付いておらず、また優先席でもなかったことから、大変失礼なことをしたと反省する一方で、自分では「思いやり」からとった行動が相手を“傷つける”こともあるという、『思いやり』の難しさを認識した（今になって思うと、「レディーファースト」ですから」とか「次降りますから（嘘でも）」とか言って座らなければ良かったのかもしれない）。

また数年前の夕方の通勤時間帯を少し過ぎたもののまだ比較的混雑している電車での経験であるが、たまたま「優先席」横の乗降口から乗ったところ、優先席に座っていた大学生と思われる青年が、スッと立ち上がり、私に向かって「どうぞ」と言って席を譲ってくれた。多少疲れ気味だったこともあり、「どうも」と軽く会釈し有難く座らせて頂いた。しかし座ってから「俺は「優先席を必要とする高齢者」に見られたのか？」、「いや、多分青年は若い自分が優先席に座っていて、青年と比べて“若くはない”俺を立たせているのに抵抗感があっただけだろう」等々勝手に思いを巡らせながら帰ったことがあった。青年の「思いやり」を素直に『ありがとう』と受け入れようとしない“ひねくれ者”の自分に「これからは素直に『ありがとう』と応じよう」と心の中で言いきかせた。

私自身は空席がある場合を除き、「優先席」でなくとも全席で“席を必要としている”人に譲る習慣が浸透するのが望ましいと思っている。しかし過去に横浜市営地下鉄や阪急電鉄で「優先席」を設けず「全席優先席」制を実施したことがあったが、やはり過度に集中する通勤混雑等の社会環境から浸透せず、「優先席」設置に戻った。このことは「優先席」の設置が稀な諸外国に比べ日本人が「思いやり」で劣ることとは思わない。表現の仕方が下手、他人の目を気にし過ぎる（恥ずかしがりや）等の“日本的気質”が主な阻害要因ではと経験的（独断的？）に認識している。

あまり堅苦しく考えず、気軽に『思いやり』を体現し、素直に『ありがとう』と受け入れる、そんな社会が防災・減災、強靱な地域・国土形成の源であり、延いては戦争の無い平和で持続可能な世界に繋がると信じている（ちょっと飛躍し過ぎ？）。

間違い探し

学術論文などを投稿された経験がある方は身に覚えがあるかと思いますが、査読によって記述の間違いを指摘されることは口惜しいことです。ただ、どんなに注意していても、“岡目八目”で他人は気が付くのに自分の力だけではなかなか間違いをゼロにできません。

一方、他人の間違いにはよく気が付くものでお節介と思われることを恐れながらついつい指摘したくなるものです。

街を歩くと横文字が目につきますが、職業的な習性で、おかしな英語に気が付くことがよくあります。あるとき、行きつけのスーパーマーケットで以下のような英語

We and XXX(スーパーの名前) are offering a fresh **vegetable** and **adelicious** fruit cheaply for **every day** customer.

のプラカードを目にしました。誰のための英語なのかは判然としませんが、明らかにおかしいので、よせばいいのに、

We **at** XXX(スーパーの名前) are offering a fresh **vegetable** and **a delicious** fruit cheaply for **everyday** customer.

(私たち XXX は、**毎日**のお客様に新鮮な**野菜**や**おいしい**果物を安価にご提供しております)

とすべきでは、とスーパーの本店に手紙を出しました。暫らく返事はありませんでしたが、ある時、くだんのスーパーに行きましたところ、

We and XXX(スーパーの名前) are offering a fresh **vegetable** and **a delicious** fruit cheaply for **every day** customer.

となっており、everyday (毎日の、形容詞)ではなく、依然として **every day** (毎日、副詞)のままになっています。うるさい外国人がいたら何か言われそうな気がします。

スーパーでの件では、家内は「お節介ね」といってあまり快く思っていないようでした。

ことほど左様に最近はやたらと五月蠅うるさくなった、というのが家内の思いのようです。人を不快にさせる御節介は控えようと思いますが、“間違い探し”の癖は改まりそうにありません。

実は、かく言う筆者にも同じ間違いをした経験があります。随分以前に Facebook に孫と一緒に写真のキャプションに、うっかり、with **grand children** としたところ、英語のご堪能

な著名な先生から、「安原さん，with **grandchildren** ですよ」と指摘されました。日ごろ，学生さんを中心に若い人たちには、「できるだけ，^{こまめ}細目に辞書を引くように」と言っているくせに，だれが見ているのかわからない Facebook で十分な確認を怠って一語と二語の区別を間違えるのは恥ずかしいことです。“やたらに，外国語を使用しない，使用するときは，細心の注意を払うこと”は，いくつになっても教訓にしておかなければなりません。

間違いを 孫と競^{きそ}いて 探しおり

ゆるゆるのとき 忽^{たちま}ちにして

代表理事 安原一哉
(令和4年6月1日)